

継続調査にみる意識の変化

調査の種類——悉皆調査と標本調査——

今年行われる浄土真宗本願寺派の宗勢調査に関連して社会調査の話題をいくつかふれたいと思います。宗勢調査は国が行う国勢調査に相当するもので、すべてのお寺の状況を把握して、これからの本願寺派のあり方を考えようと計画されて

本年（二〇二〇）中に、第十一回宗勢基本調査が実施されます。

二〇一五（平成二十七）年に実施された第十回宗勢基本調査では、教区による寺院運営の違いや地域と寺院との関わりなど、さまざまなことがわかりました。この結果は、各教区で実施した説明会や『宗報』（二〇一六年一月号）に掲載された「中間報告（単純集計）」、宗門内の各寺院に送付した『浄土真宗本願寺派 第十回宗勢基本調査報告書』に報告されています。

第十一回調査では、寺院の現況がよりわかるよう、組や行政単位など具体的な調査分析をめざします。

第三回の今号は、社会調査のあり方と、その調査からみえてくるものについて報告いたします。

います。国勢調査はすべての世帯を対象に調査が行われますが、この宗勢調査も同様にすべてのお寺を対象にしています。このような調査を全数調査あるいはしっかい悉皆調査といいます。

これに対して、新聞社などが行っているほとんどの世論調査は、国民全部を調査することはできませんから、数千人規模の人々を無作為に抽出してそれらの

人々を対象に調査しています。その調査結果から全国民の意識がどうかを予測します。この方法を標本調査といいます。一部の人のだけの調査では間違いではないかという誤解がありますが、きちんと調査ができれば、誤差は二―三％程度であることが統計学によって証明されています。国勢調査はそうした誤差がないように全体を調査していますが、莫大な手間と費用がかかっています（それを少しでも削減するために最近インターネットでの回答も認めるなどの対策がとられています）。

宗勢調査はお寺の数が国民全体に比較すれば桁違いに少ないので全体を調査することが可能ですから、正確な情報を集めることができます。ただし、いづれにしても、すべての人に調査に協力してもらえない場合は、全体の状況把握がゆがんでしまいます。

さて、約五年前にも一〇年前にも調査されてきたので、また同じ調査かと思われるかもしれませんが、国勢調査も五年ご

とに行われています。お寺の場合はそれほど変化がないと思う方もあるかも知れませんが、ずいぶん変化していると感じている方もあるでしょう。その変化あるいは不変の状況をきちんと把握することは、今後のあり方を考えるのに重要なこととなります。

継続して行う調査でみえてくるもの

―自然との関わり―

また、標本調査による調査は誤差があると書きましたが、何度か継続して調査することによって、変化の様子を把握することが出来ます。統計数理研究所が一九五三（昭和二十八）年から五年ごとに行ってきた「日本人の国民性調査」は二〇歳以上の国民全体から無作為に選ばれた三〇〇〇人規模の人々に調査されていますが、そこでみえている変化の例を挙げてみます。

大きな変化として挙げられることの一つに、自然と人間の関係について尋ねた

質問で、三つの回答の選択肢があります。

- 一. 人々が幸福になるためには自然に従わなければならない
- 二. 人々が幸福になるためには自然を利用しなければならない
- 三. 人々が幸福になるためには自然を征服しなければならない

上記の中から一つを回答するものです。

まず二〇〇〇（平成十二）年以降の調査では、一番目と二番目の回答をする人がほぼ同数で、三番目の回答をする人は五％程度しかいません。しかし一九五三（昭和二十八）年は三番目を選ぶ人は一番目を選ぶ人よりも多かったのです。

そして一九七〇（昭和四十五）年前後にそれが逆転して「征服」から「従わなければならない」に急激に変化しました。これはその頃の社会的背景、戦後の復興期から高度経済成長がある程度進み、公害が大きな問題になったことと関係があると考えられ、それまでの「征

服」が新しい考えとして歓迎されていた世間の風潮が変化したことが実証されたといえましょう。その後「征服」はさらに少数意見になってきたというわけですね。

継続して行う調査でみえてくるもの

—あの世はあるのか—

また、考え方の変化は、年齢との関係をもてもよりその状況がみえてくることがあります。その例として「あの世はあると思うか」と尋ねた質問の回答の変化を挙げてみましょう。ただしこの例は継続されていなかったのだからなかったことと、その後の継続によってわかったことの両方が示された例でもあります。前の例と同じ「日本人の国民性調査」の質問で「あなたは『あの世』というものを信じていますか?」というのがあります。

まず、一九五八（昭和三十三年）の調査では、「信じる」という回答は二〇%、

「信じてはいない」が五九%でした。その後長くその質問はされなかったのですが、二〇〇八（平成二十）年に同じ質問をしたところ「信じる」は三八%、「信じてはいない」三三%へと変化していました。「信じる」人が増えたことがわかります。

そして、この年齢別の回答傾向をみると、一九五八（昭和三十三年）年には若い世代ほど「信じてはいない」という回答が多く、高齢の世代の方が「信じる」が多く、「あの世」を「信じる」のは古い考え方であると解釈できました。ところが五〇年後の二〇〇八（平成二十）年の調査では、若い世代の方が高齢の世代よりも「信じる」という回答が多くなっています。つまり「あの世」を「信じる」のは高齢者の古い考えとはいえなくなっているのです。その傾向は二〇一三（平成二十五）年の調査でもほぼ同じで、二〇〇八（平成二十）年だけが特別だったわけではないこともわかりました。

「信じる」と言ってもその意味が変化

してきているだけという解釈もあります。が、深い考察がなされる材料として重要なものとなります。この調査項目については、一九五八（昭和三十三年）から二〇〇八（平成二十）年までの間の継続が途切れており、徐々に変化したのか、ある時期に大きく変化したのか、あるいは増えたり減ったりしてきたのかがわからないことが残念なところです。

一度の調査ではつまらないと思われる調査結果であっても、何年かごとに継続して調査することによってみえてくることは多いのです。

今回実施する第十一回宗勢基本調査においても、同様に継続した設問が多くあります。そこから新たにみえてくることがあると期待しています。

（第十一回宗勢基本調査実施センター調査研究員 林文